

シャネルNo.5 の原風景

大 野 斉 子

序

1 シャネルNo.5 の作者は誰か

シャネルNo.5 は世界でもっとも有名な香水のひとつである。シャネルNo.5 は人気が高く、世界の市場においてトップクラスの売り上げを誇ってきた。だがシャネルNo.5 が特別なのはこのためだけではない。現在、市場でシャネルNo.5 と人気を分かち多くの香水とシャネルNo.5 の大きな違いは発売からの年月の長さにある。ほかの香水が比較的新しく、近年になってから作られたものであるのに対し、シャネルNo.5 はそのどれよりも古い。この香水は1920年に生み出され、1921年に発売された。シャネルNo.5 は、90年以上の歳月を経て輝きを失わない稀有な香水なのである。

そのためシャネルNo.5 は文化論においても言及されることが多かった。そこでは概してシンプルなスタイルを追求したシャネルのファッションと、シャネルNo.5 のボトルのミニマルなデザインの相同性が指摘され、そこからシャネルNo.5 がシャネルのファッションを支える現代性や美学の中から生み出されたものであるという結論が導かれる。だが、本当にそうなのだろうか。確かにシャネルNo.5 が作られたのは、デザイナーであるガブリエル・シャネルが打ち出すスタイルが注目を集め、ファッション界をリードするようになったモダニズム全盛の時期であった。

しかし実際に香水のシャネルNo.5 を創作したのは、ガブリエル・シャネルではなく調香師のエルネスト・ボーである。

シャネルNo.5 という名称に含まれるシャネルの名は香水の企画販売者を示すに過ぎない。

2 商標の呪術性と作者性をめぐる誤謬

こうした考え方に反対の向きもあろう。ブランドは品物を実際に作り出す者に注文を出し、イメージ通りの商品を世に送り出すのであるから、

創作過程でブランドの意思や主導権を否定することはできないという意見である。また人々は商品そのものを使用すると同時にブランドの記号を消費する。この意味で商品とブランドを分かちことはできないという考え方も存在する。

しかしシャネルNo.5 に関してはこうした議論は有効ではない。というのもシャネルが調香師のボーに香水を発注する際に伝えた要求には具体的な香水のリテラシーが見られないからだ。

様々な人によって語り継がれたシャネルの注文内容には以下のようなものがある。たとえばシャネル社の現在の調香師ジャック・ポールジュは、シャネルがボーに「調香師ですら嫉妬したくなるような香水」を作るように依頼したと述べている。シャネルの友人であったミシア・セールによれば「夏の庭の香りがする香水」を依頼したという。セールはほかにも、シャネルが欲しがっていた香りとは「服飾のように用途の広い香水」であったとも述べている。¹

さらに、ボーの作った試作品の中からNo.5 を選び出した時のシャネルの言葉としてシャネルの伝記作家のピエール・ギャラントは「女性のにのする女性の香り」という言葉を記している。こうした言葉には独特のイメージがあるが、「夏の庭の香り」以外はどのような系統・香調の香水かがはっきりしない。

しかもこうして後世に伝えられるシャネルの言葉が事実、シャネルがボーに発した言葉であるという保証は残念ながら薄い。というのも、複数存在する伝記に記録されているシャネルの言葉は、後年シャネルが伝記作家に語った言葉であるが、シャネルが自らについて語る内容には誇張や事実と反する内容が多いことが知人らの発言から知られているためである。

シャネルNo.5 をめぐるシャネルとボーのやり取

りのうち、信じるに足る情報として唯一採用するのは、その場において客観的な記述をすることの出来たボーの証言だけである。

シャネルの伝記が多数出版されたのとは対照的に、エルネスト・ボーが79年の生涯で残した回想は一つしかない。それは雑誌『香水産業』«Industrie de la Parfumerie»に1946年に掲載された「調香師の回想」«Souvenir d'un parfumeur」と題する文章である。これは1946年2月27日に化学会館という場所で開催された香水業界の技術団体が主催する講演会でエルネスト・ボーが行った講演の記録である。控えめな言葉で語られたこの講演録の内容は、他の資料と突き合わせても矛盾する点がほとんど出てこない。

この講演録の中でエルネスト・ボーは以下のように述べている。

「私は自分の作品である1番から5番、20番から24番の二つのシリーズを彼女に見せに行きました。彼女はそこからいくつかを選び、そのうちの5の番号のついた香水を選びました。²⁾」

このエピソードが証明するのは、試作品から5番を選び出したシャネルのセンスの卓抜さであって、創作段階におけるシャネルの意思の働きではない。

また、ブランドの記号が持つ重要性についても同じことが言える。ファッションの市場においてはブランドが重要な役割を担っている。しかし、ブランドが効力を最大限に発揮するのが視覚の領域であることを確認しておかなくてはならない。

視覚的な情報の体系において記号は関連する情報の束の意味づけを強力に行う。記号に誘引される商品の価値の高さや物神崇拜の感情は抽象的な観念である。視覚は知覚の中でも突出して観念的・抽象的な情報の処理を得意とする感覚として文化的な発達を遂げてきたことが、これと深くかわっている。

それに対して嗅覚は必ずしもブランドの記号性との親和性が高いとは言えない。ここには、一般の人々の間で嗅覚と言語のつながりが社会的に共有されていないという事情がある。また香水の選択にあたってはブランドの記号のように抽象的な価値ばかりでなく香りに対する個人的・生理的な好みや、それに少なからぬ影響を与える香りの文

化の地域性や伝統といった、香りに対する社会的・文化的な嗜好が強力に働くことも関係している。

このように考えるとシャネルNo.5がシャネルの創作であると考えるのは多くの点で誤謬であるといわざるを得ない。シャネルのファッションとシャネルNo.5の重なり合いは、シャネルという商標という呪術的なまでに強い力を持つ記号と1920年時点でシャネルが提示しようとしたイメージとのリンクにしか存在しない。

3 シャネルNo.5再考

これまでに出されたシャネルNo.5をめぐる論考に決定的に欠けているのは、エルネスト・ボーの作者性の認識である。この認識の前提にあるのは香水が単なる商品ではなく、それ以上のもの、すなわち芸術作品であるという立場である。これはエルネスト・ボーの信条であり、他の多くの調香師に共有される考え方である。

商品としての香水は多くの人々の手になる共同作業の産物である。香水そのものを作る調香師に始まり、ボトル、パッケージやポスターなど商品を構成する要素ごとに作者がいる。

シャネルNo.5のボトルのデザインの原案はシャネルによって提示された。装飾をそぎ落としたこのボトルのシンプルなフォルムはシャネルのファッションと共通する美しさを持っている。シャネルNo.5が発売した当時のシャネルのコンセプトは、確かにこのボトルに表現されているのだろう。ここには幾何学的なフォルムの純粹さや機能美を追求したモダニズムの精神が確かに息づいている。

この意味でボーはシャネルNo.5の創作者の一人にすぎないのかもしれない。しかしシャネルNo.5の本体—ボトルやパッケージとは区別される特権的な構成要素は香水そのものである。中身の香水は必ずしもボトルから読み取られるモダニズムやミニマリズムの精神に包含されているとは限らない。シャネルは確かに、創作者としての強力な意思と能力を持っていたが、調香師エルネスト・ボーもまた一切の妥協を許さず創作に向かう人物であった。ボーの香水の文化的な水脈は、やはりボトルとは別に考えるべきである。

シャネルNo.5はこれまで、1920年代のモダニ

ズムの美学の表れとして語られてきた。しかしこれまで述べてきたようにその前提を疑えば、シャネルNo.5は別の視点から論じる必要があることがわかる。

シャネルNo.5の本体は香水である。ボトルやパッケージ、商標と分けることによってシャネルNo.5を香水そのものから、すなわちエルネスト・ボーの生きた文化的な水脈からとらえなおすことにしたい。

1 エルネスト・ボーとロシアの香水文化

1 エルネスト・ボーの経歴

シャネルNo.5を作ったエルネスト・ボーとは一体どのような人物なのだろうか。

エルネスト・ボーはロシア語名をエルネスト・エドアルドヴィチ・ボー（Эрнест Эдуардович Бо）、フランス語名をエルネスト・アンリ・ボー（Ernest Henri Beaux）という。父はフランス人であり、フランスをルーツとする家系の出身である。しかし母親はロシア人で、ボー自身はモスクワに生まれ育った。

エルネスト・ボーが生まれたのは1881年とされるが、この時代にしばしば見られるように生年の情報には揺れがあり、1882年とする資料もある。父親はエドアルド・ボーといい、フランスのリールに生まれ、若くしてロシアに移住した。エドアルドはフランスとロシアの間で小さな貿易商を営んでいた。

エドアルドには息子がおり、兄は父と同じ名のエドアルド、弟がエルネストであった。エドアルドは1862年生まれでかなり年の離れた兄弟だった。

ボー家の出世頭となったのは兄エドアルドである。エドアルドは1891年にモスクワで仲買業を起こしたが、その後1898年から香水会社のラレ社（«А. Ралле и Ко»）の支配人となった。さらにモスクワの薬品・化学製品の製造会社であるキョレル社（«Кёллер Р. и Ко»）と薬品・化学製品の販売会社であるエルマンズ社（«К. Эрманс и Ко»）の支配人兼理事会のメンバーとなる。1906年以後は在モスクワのルーマニア領事を務め、同年、モスクワ香水製造業者協会を組織し、主導した。³

ラレ社はロシアでもっとも古い香水業者であると伝えられる。1843年にフランス出身の香水師アルフォンス・ラレがモスクワのヴァツカヤ通りに創業したのが始まりである。ただし、実際にはラレ社が操業する以前に同じ敷地にブイスという香水商が存在していた。⁴したがって、ラレがロシア最古の香水業者というのは正確ではない。厳密には、ラレ社は帝政末期まで存続した大規模な香水会社の中で最も古い会社というべきだろう。

創業者のアルフォンス・ラレは19世紀後半に会社を残してフランスに帰国した。その後を引き継いだのがロシア人やロシア在住のフランス人、ベルギー人の構成する役員会であり、その中で支配人の役職に就いたのがエドアルド・ボーであった。⁵

エルネスト・ボーは17歳で兄が経営するラレ社に入社した。

エルネスト・ボーは講演録の中で、自分が香水の世界へ足を踏み入れた時のことをこのように述べている。

「1898年、モスクワで私は職業の第一歩を踏み出しました。そこはフランス人居留民がとりわけ重要な地位を占め、絹、綿織物、香水などの非常に多くの企業を経営していた外国人街でした。

私の兄はラレ社の派遣取締役を務めていました。ラレ社はロシアに2グロス（=288）⁶あった香水会社の一つです。フランスで軍務につくまでの間、私はまず石鹼製造を学び、その次に1902年に帰還してから香水製造を学びました。⁷」

なぜエルネスト・ボーはラレ社に入ったのだろうか。ラレ社は当時、兄エドアルドが代表を務める会社であったが、おそらくその縁ばかりではない。ボーをめぐる同時代人のいくつかの回想の中でラレ社はボー家の財産であったと述べられている。当時のラレ社の株主や所有関係については不明なので推測にとどまるが、ラレ社の経営がボー家の家業となっていた可能性はある。

エルネスト・ボーは始めから、ラレ社の経営部門ではなく技術部門に入った。早いうちから自分の適性を見極めていたのかもしれない。当時、ラレ社は香水だけでなく化粧品、石鹼など多くの品目を製造していた。エルネストは入社後しばらくの間は石鹼製造の技術を学んだ。その後、当時ラ

レ社の主任調香師を務めていたレメルシエのもとで調香技術を学んだ。

エルネスト・ボーが調香師として成長し、活躍したのはロシアであった。すでにロシアには大規模な香水産業が存在し、ボーのような優れた調香師を輩出する環境は整っていた。⁸

2 シャネルNo.5のインスピレーションの源

シャネルNo.5が優れた香水であったために、発表されてから現在に至るまで、その創作の秘密について様々な憶測がなされてきた。中には助手が誤ってアルデヒドを大量に投入したことで偶然にシャネルNo.5ができたという説もあった。いずれにせよ、シャネルNo.5の誕生をめぐる諸説の関心は香水の処方に含まれるアルデヒドという香料に集中していた。当時まだ新しい物質であったアルデヒドは、香水への実用化の方法が限られていた。しかしボーは誰も考え付かなかった方法で数種類のアルデヒドを加え、香水に見事な効果を与えた。人々の関心はいかにしてボーがアルデヒドの効果を発見したのかという調香の手法に向いていた。

だがエルネスト・ボーはこうした人々の関心に一切答えなかった。その代りボーは1942年の講演録の中でシャネルNo.5のインスピレーションの源について述べている。

「2月27日の講演で、No.5の創造をテーマにした質問がなされました。

私がそれを作ったのはどんな時代だったでしょうか？ちょうど1920年のことです。私が戦争から帰還するときでした。私は白夜の時期に北極圏にあるヨーロッパ北部の地域の田舎を去ろうとしました。そこで湖や川がたいへんみずみずしい香りを発散させていました。

私はこのノートを記憶にとどめ、実現しました。⁹」

この言葉はボーが自ら語ったエピソードであるにもかかわらず、アルデヒドほどには注目されてこなかった。

具体的にこの湖がどこを指しているのかについてボーは一切触れていない。その曖昧さ故か、作家のフランソワーズ・サガンは『香水』というエッセイの中で、北の湖の香りを元にして香水を作ったというボーの話を受けてこう述べている。「どうもマユツバものだ。香水はそんな風にしてつく

るものではない。単なるきっかけと言うべきであろう。¹⁰」

だが、故郷の自然の香りを香水にしようとする調香師は現在も存在する。エルネスト・ボー自身はほかの香水を作る際にも具体的なインスピレーションの源が存在することをヴィリギンという同僚の調香師に明かしている。

「あるときエルネスト・エドアルドヴィチにどのようにこの香水（'Bois des Iles'）を着想したのかと尋ねた。彼は「スベードの女王からだよ。」と答えた。¹¹」

ボーが述べた北国のみずみずしい香りが創造源であることを否定する理由はない。

3 特別な風景

エルネスト・ボーは調香師として創作に向かうときにその原風景をロシアに求めていた。

ボーはフランスの血を引いているが、生まれ育った故郷は帝政時代のロシアだった。ボーにとって帝政ロシアの文化とその記憶がいかに重要なものだったかについては改めて考慮しなくてはならない。とりわけ故郷を捨てた亡命者の手による創作を考えるうえでこの視点を欠くことはできない。

シャネルNo.5の原風景となった湖が一体どこにあったのかをエルネスト・ボーは明確にしていない。ロシアかもしれないがボーの用いた表現から北欧の一地域である可能性もあり、確定することはできない。

しかしこの原風景がエルネスト・ボーの体験に基づく記憶であることは確かである。そして重要なのは、この風景に出合った頃、すなわち戦争からの帰還がエルネスト・ボーの人生においておそらく最大の転換期にあたるということである。

それはボーにとってどのような時期だったのだろうか。

エルネスト・ボーは前述したようにモスクワにあるラレ社の調香師としてモスクワで働いていた。しかし第一次世界大戦の始まりに伴いフランス軍に従軍する。これより少し前の1912年にボーの兄、エドアルド・ボーが他界し、ラレ社で要職にあるボー家の人物はエルネストだけになってしまった。なぜエルネスト・ボーは1914年にラレ社を離れ、フランス軍に従軍したのだろうか。

その明確な理由は不明であるが、1914年夏のフランスの動向から推測することは可能である。サラエボ事件以後ヨーロッパ各国の間で高まった軍事的緊張と相次ぐ宣戦布告にともない、フランスは8月1日に総動員令を發布した。その2日後にはフランスはドイツに宣戦を布告し、さらにドイツからの宣戦布告を受け第一次世界大戦に突入する。¹²

フランスは総力戦体制をとり、8月3日の宣戦布告の時点で88万2000人であった現役兵員数は、総動員令によって徴集した結果、8月18日までに462万人に増えた。¹³ その後1918年11月の休戦成立時までの総動員数は士官19万5000人、兵卒774万人、あわせて793万5000人に上った。¹⁴ エルネスト・ボーがフランス軍にこの時期に従軍したということは、徴兵の対象になった可能性が高い。前述したようにボーは1902年にフランスで軍務についているが、これはちょうどボーが20歳の時のことであり、徴兵されたとみられる。ボーに関する資料に国籍を明記しているものはないが、ボーはフランス国籍であったと考えるべきである。

エルネスト・ボーは1914年から1919年まで軍務についていた。この間に起きたロシアの激変とともにボーの人生は大きく変わってしまった。1917年の革命によって帝政は終わりを迎え、ボリシェビキ主導の社会主義政権が確立した。

それまで支配階級であった貴族や経済の主軸を担ったブルジョワジーは財産を失った。中には生命の危険にさらされ、亡命を余儀なくされる人々もいた。

ラレ社も例外ではなく、1917年という早い段階でラレ社の大規模な工場は国有化され、ボーは財産を失った。ラレ社のみならず、ロシアの香水産業を支えていた主要な企業はほとんどが接収され、香水業は事実上、停止状態に追い込まれた。

ボー家の人々やラレの従業員は居場所を求めてロシアからフランスへと移住した。

革命をはさみ、ボーの家庭生活にも変化があった。エルネスト・ボーはモスクワでシュヴェフという女性と結婚し、二人の間には息子エドアルドが生まれた。¹⁵ だがボーは妻と何らかの理由で離別し、フランスに移住した後アルジソンという

女性と再婚して、娘のマグダリナをもうけた。¹⁶

エルネスト・ボーが従軍していた1914年から1919年の間に、ロシアにおけるボーの居場所はなくなった。ボーは講演録でロシア戦線を離れ、1919年にフランスへ向かった道程を「帰還」と呼んでいる。しかしその内実は帰還ではなく、祖国を離れる旅だった。ボーはこの時ロシアとロシアで過ごした人生のすべてに別れを告げ、いつ帰れるかもしれないままフランスへ向かったのである。

その時に訪れた湖の香りを創作のインスピレーションにしたとボーは述べている。この言葉から我々はボーの特別な思いをくみ取り、この湖に改めてシャネルNo5の原風景としての意味を見出すべきではないだろうか。

とはいえこの原風景がいかなるものであったのかは講演録の内容だけではわからない。これを理解するためにはボーのロシア最後の日々を知る必要がある。以下ではエルネスト・ボーの軍隊時代に光を当てる。

Ⅱ 第二章 エルネスト・ボーの軍隊時代

1 ボーの軍隊時代

エルネスト・ボーが1914年にフランス軍に従軍してから香水界に再び現れる1920年までの約6年間は調香師としての活動の空白期間になっている。

しかしボーのその後の創作活動と制作した香水の質を考慮すると、決して空虚な時間ではなかった。むしろ大きな転機としてとらえるべきであろう。

とはいえ、どこでどのような軍務に携わっていたのかについてボーはごく親しい友人に語ることはあっても記録に残していない。

しかし1918年の夏から1919年までの期間については、戦時にエルネスト・ボーと接触のあった人物の回想録や、内戦期の戦史、ジャーナリストの調査などから断片的にボーの足跡をたどることができる。

1918年夏以降のエルネスト・ボーに直接会った人物が残した記録として質量ともにもっとも充実した内容を持つのがパーヴェル・ラスカーゾフの『捕虜の手記』である。ラスカーゾフは、エル

ネスト・ボーが所長を務めていたロシア北部にあるムジユク島の強制収容所に捕虜として収容されていた人物である。

ラスカーゾフは1892年にオネガで生まれ、1917年の10月革命のころから水運労働者連合の活動に参加した。1918年にはアルハンゲリスクにおいて商船隊の国有化を進めるソビエト政府の方針を実現するために積極的に働いていた。

しかし同年8月に連合軍と白軍に捕えられ、アルハンゲリスクに収監されたのち、アルハンゲリスク沖にあるムジユク島の強制収容所へ送られた。翌年1919年11月に連合軍が撤退した折、人質としてフランスへ連行され、1920年に釈放された。¹⁷

ラスカーゾフの回想録は、個人の目線から戦争中の出来事を描いた記録である。エルネスト・ボーはラスカーゾフが出会った人物の一人として登場する。だがこの回想録にエルネスト・ボーがなぜこの時期にムジユク島にいたのかという経緯までは書かれていない。

ラスカーゾフの手記を紹介する前に、エルネスト・ボーが配属されていたフランス軍の動きについて、ロシア革命後の内戦の歴史とともに概観しておきたい。

2 干渉戦争とムジユク島

1914年以降、ロシアの置かれた状況は大きく変化した。1914年8月2日にロシアはドイツに宣戦を布告し、連合国の一員として第一次世界大戦へ入った。¹⁸

しかし相次ぐ内政の混乱で国民の不満が高まり、1917年に革命が起きた。10月革命によって政権を掌握したボリシェビキを中心とするソビエト政府は、連合国の抗議を押し切って1917年11月にドイツと休戦協定を結んだ。¹⁹ 1917年12月にはドイツ、オーストリア＝ハンガリーなどの中欧四国同盟軍との間で休戦協定が結ばれた。²⁰ 翌年の1918年3月にロシアは単独でドイツと講和条約を締結し、大戦から離脱した。²¹

しかしボリシェビキ政権に抵抗する勢力が都市を占領するなどの軍事行動をロシア各地で始める。これらの勢力は統一組織を持たなかったが白軍（白衛軍とも呼ばれる）と総称され、ボリシェビキの組織した赤軍と内戦を繰り広げた。

不安定なロシアの情勢に利害の絡む諸外国は、ロシア国内の政治・軍事的な混乱状態に干渉した。1917年12月にはルーマニアの侵攻に続き、ドイツ、オーストリア軍やトルコ軍が侵入を始めた。イギリス、アメリカ、フランス、日本の軍隊はロシア北部と極東の港をドイツ軍の侵略から守るという名目で内政干渉に踏み切り、軍を上陸させた。ロシアではこうした外国の侵攻による干渉戦争と国内の内戦が同時に進行した。²²

エルネスト・ボーは1918年にフランス干涉軍の一員としてロシアの北部の港町アルハンゲリスクにやってきた。この時期のアルハンゲリスクにおける内戦の状況はロシアの戦史に詳しく記録されている。

1918年夏にイギリス・アメリカ軍を中心とする干涉軍がアルハンゲリスクに上陸した。アルハンゲリスク県、郡、およびアルハンゲリスク市のソヴィエト当局のメンバーをすべて逮捕し、ボリシェビキ党员やアルハンゲリスクにいるすべての協力者たち、すなわち労働組合員や共同組合員を逮捕した。

干涉軍はアルハンゲリスクを占領し、占領下の地域の住民にも逮捕の手を伸ばした。干涉軍はイギリス・アメリカ・フランスの将校を構成員として禁固者の裁判を行う軍事法廷を作った。この際に暗躍したのが干涉軍の総司令官の配下の防諜部隊と懲罰部隊である。²³ エルネスト・ボーはまさにこの時期にアルハンゲリスクで防諜部隊に配属され、秘密諜報員として活動していた。

エルネスト・ボーはフランス軍の中尉としてアルハンゲリスクに駐屯した。エルネスト・ボーの主要な任務はスパイであった。ロシア人と同じ高い水準のロシア語能力を持っていたことがその理由であったが、ボーの具体的な業務は諜報活動というよりは赤軍派の軍人を連合軍側に寝返らせるための説得や捕虜の尋問であった。エルネスト・ボーは1918年の9月から翌年の1919年までムジユク島に収容所長として滞在した。

アルハンゲリスクが干涉軍の占領下にあった1918年から1919年までの1年間で、40万人いた占領地域の住民のうち3万8000人が逮捕・収監された。そのうち8000人が銃殺され、1000人以上の人々が殴打や病気が原因で死亡した。²⁴

ムジユク島はアルハンゲリ斯克市から北北西に約 35 キロメートル沖、北緯 64.5° に位置する白海の島である。²⁵ 南端から北端まで 15 キロメートルの小さな島で針葉樹と凍土に覆われ、湖沼の多いさびしい光景が広がっている。

さびしくも静かなこの島が、内戦の捕虜たちにとって凄惨な体験の場となったことは今も残る収容所の廃墟に刻まれている。



図 1 ムジユク島の捕虜収容所（1918 年）の写真²⁶

干渉軍がムジユク島に 1918 年に建設した強制収容所は、コラ半島ヨカニガに作られたもう一つの収容所とともに「死の収容所」と呼ばれた。ここに収容される捕虜は死を運命づけられるという意味である。

ロシアの戦史には捕虜の待遇がどれだけひどいものであったかについて以下のように記されている。捕虜の食事は乾パンと、魚を入れるのに使っていた臭い樽に汲まれた沼沢地の水だけだった。悪天候や寒気の中、朝早くから重労働にかり出され、バラックにも雨漏りやすきま風が吹き込み、衰弱した者から死んでいった。そのほか病気、殴打による死も少なくなかった。収容所を管理する干渉軍は死者を埋葬することができなかったため死体を穴に投げ込んだという。²⁷

干渉軍による逮捕は激しさを増し、ロシア北部を占領していた 1 年間で地域住民の 6 人に 1 人が監獄または収容所に収監された。

3 『捕虜の手記』に描かれたボー

本稿では軍隊時代のエルネスト・ボーの人物像

を再現するうえで先に挙げたラスカーゾフの『捕虜の手記』を典拠として扱う。

ただしこの回想録の特色についてあらかじめ断っておかなくてはならない。著者のラスカーゾフは支配と暴力を受ける側の視点から手記を書いたということである。ラスカーゾフは一貫してエルネスト・ボーを残酷で威圧的な収容所長として描いている。しかしこの人物像にはラスカーゾフの被害感情が反映されている可能性を考慮する必要がある。

実際、戦時のエルネスト・ボーに関する証言の中にはラスカーゾフとは異なる視点から構成されたものが存在する。その一つは、アルハンゲリ斯克とムジユク島で捕虜としてエルネスト・ボーと接触した経験のあるマクシム・アブラモヴィチ・クズネツォフという人物が、雑誌記者に話したインタビューである。

それによればエルネスト・ボーは非常に紳士的で、正体なく酔っ払っているほかの将校たちとは違い、乱暴な口を利かず、酒も飲まない穏やかな人物であった。²⁸ エルネスト・ボーは幅広い教養の持ち主で、ロシア語を完全に操っていた。ムジユク島でボーは、よく白海の海岸を散歩していたという。²⁹

クズネツォフが語るエルネスト・ボーの人物像は、ラスカーゾフの記録とは大きく異なる。その理由はラスカーゾフの以下の記述から推察できる。

「私たちがムジユク島に到着してから一週間たったころ、中尉（ボー）は我々全員を「丸刈りに」するよう命じた。「将校殿たち」は例外で、彼らには我々「平」が奪われていたひげをそる特権さえも与えられた。³⁰」

エルネスト・ボーは捕虜として収容したロシア人を将校か下士官かではっきりと扱いを変えていたというのである。クズネツォフは将校であり、ゲオルギー勲章を授与された軍人である一方、ラスカーゾフは下士官であった。

このように見る人によって、掘り起こされた記憶に大きな違いがあることは明記しておかなくてはならない。しかしラスカーゾフの手記に客観性が欠けているわけではない。これはラスカーゾフの記憶の鮮明な 1920 年から 1921 年にかけて執筆

され、詳しい日付や人物名など具体的な情報が豊富であり、感情を抑えた冷静な目線から叙述されている。この手記は干渉戦争の時期の北部ロシアの状況を今に伝える貴重な資料として戦史でも参照されており、決して誤謬に満ちた資料とはみなされていない。

『捕虜の手記』にエルネスト・ボーが登場するのは1818年の9月1日のことである。以下の記述はボーがムジユク島の収容所長に就任し、初めて収容所にやってきたときのことである。

「9月1日、私たちが昼休みの後仕事へ出たときのこと、アルハンゲリ斯克から来ていた検事のドゥブロヴォとフランス軍中尉のボーが収容所に到着した。ボーは、公式には「連合軍最高総司令官司令部防諜部隊」と呼ばれる防諜機関に属する、大変恰好がよくて精力的な秘密諜報員たちの一人だった。この機関は軍事上の目的を追求するだけでなく、主に政治犯の捜査を行う秘密警察の役割を負っていた。³¹⁾

さらにラスカーゾフはエルネスト・ボーについて、以下のように記している。

「監獄と拷問、人々に与えられる非人道的な苦痛を取り仕切るこの機関の代理人が中尉のボーだった。ボーはかつてモスクワの大実業家だった人物である。中背で太っており、そのひげをそり上げて丸くむくんだ顔はブルドックを思い起こさせた。鼻眼鏡の下から光る目は冷静でゆるぎない強さをたたえているが、しばしば敵意と冷酷さが突発する—これが彼の外見であった。精力的で、残忍な行いに関して広い指導的役割を果たしていたボーは憲兵や秘密警察の典型だった。私たちが入れられたムジユク島にある捕虜収容所もまた彼の「父親らしい監督」の下にあった。³²⁾

この記述は、ラスカーゾフがボーの管理下で1年間にわたる収容所生活を送った結果として構成したエルネスト・ボーの人物像を、彼の外見を通じて描写しているくだりである。

面白いことに、戦後のフランスでボーと友好的にかかわった調香師のヴィリギンという人物が描写したエルネスト・ボーの第一印象もラスカーゾフの記述と共通する点が多い。以下にヴィリギンの回想を引用する。

「中背でがっしりしていて、エネルギーにあふ

れ、威圧的だが率直な顔をした人物だった。その頃私は好んで手相術を勉強していたので、すぐにこう思った。『これはマルスとユピテルが一つになった人だ。大胆な行動と勝利を確実にする能力を兼ね備えている。』その後私は自分の印象が正しかったことを確信することになった。³³⁾

ボーとの関係が全く異なる二人が共通して語る特徴にむしろエルネスト・ボーその人の個性が書き留められているのではないだろうか。

4 横領、懲戒房と暴行

『捕虜の手記』には、収容所長としてのエルネスト・ボーの不正行為を告発している箇所がある。ラスカーゾフら捕虜にとって、飢餓は大きな問題の一つだった。彼らは常に飢えていた。ラスカーゾフは手記の中で食料が収容所長、その他の人物たちによって横領され、捕虜の口に入らないことが問題だったと述べている。1月16日の記述から引用する。

「大陸にある村（ムジユク島から海を隔ててアルハンゲリ斯克側）から砲台へ、毎日農民の男女がやってきた。彼らは新鮮な魚、野鳥の肉、牛乳、バター、卵、その他の食材を運んできた。彼らはそれを金で売るのではなく小麦粉と交換していた。ムジユク島が赤軍の警備隊に明け渡された後、砲台にはフランス人が登録しなかったライ麦粉の備蓄が残されていたことを指摘しておかなくてはならない。中尉（ボー）はそれを自分の裁量で処理していたのである。中尉と軍医は盗んだ小麦粉と引き換えに懷を痛めず贅沢な食卓を囲んでいたが、彼らは貪欲にもそれだけでは飽き足らなかった。彼らのいた時期に小麦粉は十分な量があったため、彼らは小麦粉を鹿の角、動物の毛皮やそのほかのものと交換していた。そうしたものを記念として、ロシア極北における自分の「戦勝」のトロフィーとしてロシアから持ち出すためである。³⁴⁾

エルネスト・ボーがこうした不正行為を実際に行っていたという証言はラスカーゾフの回想以外にはなく、この証言も憶測の域を出ない。しかし戦時下に敵国の捕虜を収監していた収容所においてこうした不正が行われていたとしても不思議ではない。

ラスカーゾフが記録しているエルネスト・ボー

の記述の中でも、以下に紹介する文章は調香師としてのボーの人物像からもっともかけ離れた箇所である。1918年11月、ちょうど極寒が始まったところにエルネスト・ボーは脱走を企てた捕虜たちをとらえ、懲罰房に入れた。

その懲罰房とは地下洞窟だった。氷河の中に位置するため極めて温度が低かった。ラスカーゾフは仕事でこの地下洞窟に入ったときのことを書いている。「その中は恐ろしく湿っていて汚く、壁と天井は分厚いカビで覆われていた。床の約半分は仕切り板がめぐらされた地下牢になっていて、そこから腐ったにおいがしていた。私はそこに数分いただけだが、外に出て新鮮な空気を吸ったとたん目が回ってしまった。³⁵」

この懲罰房は内戦・干渉戦史においても知られている。3メートルの深さのある地下の穴蔵で、上部は凍土の塊に塞がれ、窓や暖炉のない「氷の殺人室」であった。³⁶

11月20日、地上で働いていたラスカーゾフは地下の懲罰房にいる捕虜の悲痛な声を聴いた。

「翌日、朝から私たちは氷河の近くの鉄条網の中で働いていた。数時間、若いパリジャン（番兵のこと）が立っていた。私たちが槌をふるう音が響くや否や、氷河の中から弱い叫びが聞こえた。「タバーリシ（同志）……」我々は無意識に仕事を止め、耳を澄ました。地面の下から押し殺した低い声がした。「タバーリシ、フランス人のところから湯をもらってきてください。後生だから。」

この悲鳴には懇願と絶望が響いていた。彼らが頼んだのは食べ物ではない。それは無駄な望みである。ただ何口かの湯を頼んだのだ。私たちは彼らの頼みを番兵に伝えた。番兵の返答は、軍曹は冷たい水以外、彼らに何かを与えることを禁じているというものだった。我々も知っていたように、ボー中尉は番兵に対して、もし我々捕虜が囚人たちと言葉を交わしたときには予告なく我々を撃つように命じていた。

「タバーリシ！」3度目の声を我々は聞いた。槌が我々の手の中で震え、ためらうような音を立てた。私は番兵を見た。番兵の頬には大きな涙が伝っていた。彼はハンカチで涙を払うと、肩にライフルを乗せ、我々を残し心を決めたように兵舎へ向かった。

彼が軍曹に嘆願するつもりであることを我々は察した。じきに番兵は戻ってきた。何も言わなくても彼のきまり悪そうな表情から、上役が頑として聞き入れなかったことが察せられた。

地下からの叫びはそれ以上繰り返されることはなかった。（中略）

さらにもう一昼夜たった。私たちが仕事へ出たとき、番兵が我々に、地下の洞窟の囚人たちは銃殺刑に処せられるため9時になったらアルハンゲリスクに連行されると言った。私とZはまき割りを割り当てられ、道から島の南端寄りに数歩離れたところで働いていた。間もなくラーゲリから護送隊が出てきた。ボー中尉と軍曹が地下の洞窟に近づいた。扉が開き、氷河の中から壁につかまりながら囚人たちが出てきた。しかし新鮮な空気が体に障り、彼らはその場で雪の上に倒れしまって起き上がることができなかった。ボー中尉は何かを大声で乱暴に叫ぶと、突然自分の杖を振り上げ、不幸な者たちを何度か打った。軍曹はこの自分の上司に倣い同じことをした。その光景は言葉で言い表せない。殴られている者たちは起き上がろうとむなしく試み続けた。彼らの足は力が入らず、何度も倒れてしまうのだ。ボー中尉と軍曹は彼らを殴り続けた。ようやく囚人たちは力を振り絞って立ち上がり、よろけつつ互いに支えあいながら、危なげな弱々しい足取りで歩き出した。その姿はまるで人間ではなく、羊皮紙が張り付いたかのような黄色く落ちくぼんだ顔をして骸骨のように痩せこけた、生きた屍のようだった。

彼らが私たちのそばを通った時、その中の一人が弱く、ほとんど聞き取れないほどの声で言った。「お別れです、タバーリシ。³⁷」のこぎりは甲高い音を響かせたかと思うと、私たちの手の中で震え、木に引っ掛かって押し黙った。私はZに視線を向けた。彼の頬を涙が流れていた。³⁸」

ラスカーゾフの回想に登場するエルネスト・ボーは一貫して冷酷な人物として描かれている。ラスカーゾフが当時置かれていた厳しい状況を考慮すると、記述に怨恨による誇張がないとは言いきれない。その一方で、ラスカーゾフの記述に見られる具体性や、フランス人を一様に悪者と決めつけない観察の冷静さはこの記述の確度を担保している。

ムジユク島においてポーが一方的な支配者であり、加害者であったことは確実である。しかしその原因をポーの人格に帰するだけでは戦時の非人間的な行為を説明することはできない。こうした暴力や虐殺が行われていたのはムジユク島だけではなかった。戦場の狂気はそれまで穏やかに暮らしていた人間を簡単に冷酷な暴君に変えてしまう。

戦時における収容所は暴力や不正の横行する場所である。むしろエルネスト・ポーは置かれた状況によって行動規範が変化する弱い人間の一人であったと考えるべきだろう。ポーが身を置いていた内戦期のロシアの凄惨を極めた異常な状況に言及しておく必要があるだろう。

5 テロルの嵐

ロシアの内戦期に、干渉軍や白軍は戦線のあった広い地域で敵対者たちに対する残忍な行動を繰り返した。ソヴィエト政権の支持者は兵士に対してだけでなく、無関係な住民に対しても強盗や暴力、射殺にいたる暴挙を繰り返した。³⁹

一方、ボリシェヴィキが1918年に創設した赤軍も暴力行為の苛烈さについては同じであった。また赤軍内部にも強制的な徴兵を忌避した者や命令に従わなかった者を、裁判なしに射殺する非常権限をもった機関が作られた。

これに加えて1918年に赤色テロルが宣言され、ボリシェヴィキの主導で多数の人々の逮捕、射殺が始まった。実質的に赤色テロルを担ったのは1917年に設立されたチェカー（ЧК）という略称で知られる国家保安機関（反革命サボタージュと闘う全ロシア非常委員会）である。

赤色テロルは1918年、エスエルによるボリシェヴィキ指導部へのテロ行為、ペトログラード非常委員会議長のウリーツキー暗殺、及びレーニンの暗殺未遂事件をきっかけに始まった。

住民への見せしめとしての性格を強く持っていた赤色テロルはボリシェヴィキに対抗する諸勢力、白軍やその関係者と見られる者すべてに及んだ。被害者の中には女性や子供を問わず、全く政治活動に関わりのない者や貴族、ブルジョワジーが数多く含まれていた。赤色テロルの一幕としてもっともよく知られているのは1918年7月の皇帝一家の射殺事件である。⁴⁰

内戦期における諸勢力同士、すなわち赤軍、白軍、干渉軍の闘争、そしてこうした軍隊やチェカーによるテロルの嵐はロシア中を吹き荒れた。この時期のロシアは人間の尊厳に対する暴虐と死に覆い尽くされていた。都市にいても戦線にいても死と喪失から目を背けることはできなかった。その時代を生きた者たちは誰もが極限をくぐり抜けなくてはならなかった。

Ⅲ シャネルNo.5の原風景

1 別れの旅路

エルネスト・ポーの軍隊時代と戦時の惨禍を知ってから、エルネスト・ポーがシャネルNo.5の原風景として語った湖の記述を読むと、そのイメージは大きく違って見えてくるのではないだろうか。

1946年の講演録でエルネスト・ポーはこう述べている。

「私がそれを作ったのはどんな時代だったでしょう？ちょうど1920年のことです。私が戦争から帰還するときでした。私は白夜の時期に北極圏にあるヨーロッパ北部の地域の田舎を去ろうとしました。そこで湖や川がたいへんみずみずしい香りを発散させていました。

私はこのノートを記憶にとどめ、実現しました。⁴¹」

これは、前述したように、エルネスト・ポーがロシアからフランスへ帰還する途中に立ち寄った場所について述べた言葉である。

エルネスト・ポーの講演録では1920年に戦争から帰還したというようにも読めるのだが、他の資料の多くは1919年を帰還の年としている。1919年春に黒海でフランス干渉軍の兵士の反乱が起き、フランス軍はロシアからの撤退を開始した。⁴² イギリス軍も1919年秋にアルハンゲリ斯克とムルマンスクから撤退している。⁴³ 干渉軍がロシア北部からいなくなったのは1919年11月である。⁴⁴

ポーが白夜の時期と述べていることから、ポーがロシアを離れフランスへ向かったのは、1919年の夏頃のことであろう。エルネスト・ポーはムジユク島を去ったあと、巡洋艦に乗り、アルハンゲリ斯克から北極海を経由してフランスへ向

かった。エルネスト・ボーがこの一節の中でシャネルNo5のインスピレーションとして提示したのは、この旅の出発点か、あるいは途中で訪れた場所である。

前述したように、具体的にそれがどこを指しているのかについてボーは一切触れていない。

エルネスト・ボーが具体的な場所を提示しなかったのには単にその必要を認めなかったということもあるだろうが、そのほかにもいくつか理由が考えられる。一つには、フランス社会において亡命ロシア人への風当たりが強かったことが挙げられる。実際にボーは亡命者としての立場をフランスの香水界で前面に出すことをしなかった。あるいは、すでに伝説となりつつあったシャネルNo5にまつわる事実を謎のまま残しておきたかったのかもしれない。また創作者として強い矜持をもつボーが芸術作品の創造の秘密を具体的に説明し尽くすことを避けようとしたとしても不思議なことではない。

だが、我々はすでにエルネスト・ボーの軍隊時代について知り、ボーが軍人として滞在したロシア北部の惨禍を知った。そうである以上、浮上するもう一つの仮説を看過することはできない。それはボーにとってこの湖で出会ったみずみずしい香りは彼の人生を凝縮した香りだったのではないかということである。

ボーが出会った湖がロシア国内であったのか、北欧であったのかはわからない。だが、ロシアで生まれ育ったボーにとって、北国の白夜に湖沼や川が放つ香りには特別の思いがあるはずである。ロシアの文化には香水の伝統こそないが、森や木々、風が運ぶ湖や野原の香りに対する豊かな感性は連綿と受け継がれてきた。エルネスト・ボーが愛した画家のレヴィタンはロシアの自然の風景を、そこに漂う空気の中層の中に描き出す達人であった。雄大な自然と空気に美を見いだす感性はロシアの芸術によって磨かれ、人々にとって祖国の心象風景の源泉ともなった。

2 死の果ての極点へ

しかしロシアに息づく自然の美は、悲しみや畏れといった負の影を内包している。憂愁をたたえた輝きに美を見出すというように、異なる意味や感情の重なりを合わせて受け入れる感性は様々な

芸術領域において歴史的に培われてきた。ボーの心を打った湖もまた、すがすがしいばかりの湖ではなかっただろう。そこには死の影が映りこんでいたはずである。

エルネスト・ボーがロシア最後の日々を過ごしたムジユク島は、飢餓と暴力と死の島だった。ムジユク島の風景には飢えて痩せさらばえ、青い顔をしたロシア兵たちが木を運ぶ姿が写りこんでいたはずだ。人気があるのは小さな集落と収容所だけの荒涼とした島だが、ムジユク島には湖がある。朝の湖には冷たく澄んだ空気が覆いかぶさり、水や草の香りを岸辺に運んでくるだろう。その姿はおそらく今も昔も、そして戦時変わらない。

エルネスト・ボーが回想で語った北の湖が、ムジユク島であったという証拠はない。だがたとえどこであったとしても、ロシアの崩壊を目の当たりにした後にロシアを離れる旅路で出合った北国の湖はボーの心に故国の原風景を呼び起こしたのではないだろうか。

ボーはフランスに移住してから、友人のヴィリギンに戦時のことについて何度も語って聞かせたという。⁴⁵ だがヴィリギンが知らされたのはボー自身の戦功についてのみであり、負の部分について語られることはなかった。しかし明らかに語ることを避けたという事実がエルネスト・ボーの戦時の記憶への屈託を示してはいないだろうか。それが思い出すことへの恐れなのか、罪悪感なのか、あるいはまったく別のものなのかを知るすべはない。しかし絶望や死の現場に身を置き、様々な形で関わった体験は負の遺産としてエルネスト・ボーの人生に残酷に根を下ろしたことだろう。

過去への追憶や喪失、罪を凝縮することとなったこの湖の表象は、しかし、エルネスト・ボーのその後の活動において単に個人の感懐で終わることなく、創造の源に昇華した。ボーがこの湖に何を見たのか。それを我々に伝えるのは、穏やかな静けさと彫琢された美しさをたたえたシャネルNo5の香りだけである。そこにあるのは望郷の念や凄惨な記憶への忤怩たる思いではもはやない。

朝の光に包まれた湖の香りには死と破壊を通り越した果てにたどり着いた静寂があったのではないだろうか。ボーはそこに旧世界が崩壊し、これから始まる新現代へと転換する世界の極点を見た

のではないだろうか。

この香水には創り手であるエルネスト・ボー自身の意思を超え、20世紀の様々な年代の流行を超えた永遠が宿っている。それを創造したのは、時代や国境を越え、すべての人にとっての始原の世界一生や死をこえた先に広がる風景である。

エルネスト・ボーが調香師として生み出した香水はシャネルNo.5以外にもたくさんある。ロシアのラレ社時代にはブーケ・ナポレオンやラレNo.1に代表される名香があり、フランスに移住してからはシャネル社のシャネルNo.5、シャネルNo.22、ボワ・デ・ジル、キューール・ド・リュシを生み出し、その後ブルジョワ社のソワール・ド・パリやコバコなどの香水を手掛けた。

だが、この中で最も長い年月を生き続け、人々に愛されてきたのはシャネルNo.5である。1919年にエルネスト・ボーがロシアを離れるとき、永久に戻ることはないと考えていたかどうかはわからない。だが翌年の1920年に作ったシャネルNo.5にはロシアでの幸福な思い出とモスクワ・ラレ社のラボラトリー、郊外の美しい自然、そして戦争時代の記憶がボーの作ったどの香水にもまして濃厚に、そして鮮やかに刻まれたはずだ。

エルネスト・ボーがシャネルNo.5以降に創作した香水には、それぞれにインスピレーションの源があるが、シャネルNo.5の湖ほど、エルネスト・ボーの人生のすべてが変わろうとする時期に出合った情景はなかっただろう。記憶を色あせないままにとどめ置く力を持った香りによって、そして調香師エルネスト・ボーの卓越した能力によって、この情景は奇跡の香水として世界に残ることになったのである。

結論

1 シャネルNo.5と赤いモスクワの比較

シャネルNo.5は文化論や香水史において言われるように、モダニズムの時代の香りなのだろうか。確かに、アルデヒドという比較的新しい合成香料をそれまでにない使い方で処方し、新たな香りを生み出したという点では画期的な香水だった。

しかしシャネルという商標を剥ぎ取り、ボーの体験と人生の歩みに照らし合わせてなお、この香水にモダニズムや現代性というラベル付けをする

ことがはたして妥当だろうか。

香水の香りそのものを分析し、評論することは難しい。とりわけ90年以上も前の1920年に作られた香水が他と比べてどのような新しさを人々の嗅覚に喚起したのかを読み解くことは困難である。

しかしあえてここでは香りを手掛かりとしてシャネルNo.5に現代性とは別の表象を見出すことにしたい。

シャネルNo.5との関連が指摘されるラレNo.1という香水がある。これはエルネスト・ボーがロシア時代に作った香水である。このラレNo.1が作られたのと同時期の1913年に「女帝の愛した花束」という名の香水がロシアで発売された。これは革命後に「赤いモスクワ」(«Красная Москва»)と名称を変え、ソ連を経て現在までロシア国内で売られている。

以下では赤いモスクワとシャネルNo.5の香りを比較する。そこからシャネルNo.5が同時代の人々に与えた特別な印象の分析を試みる。

赤いモスクワはベルガモットとジャスミンの香りが際立ち、最後にバニラが香る、さわやかで甘いフローラル系の香りである。この香水はジャスミンのほかにも様々な花の香りが使われているが、生花のみずみずしさや青臭さなどの個性を残している。この点で、花の魅力を再現しようとするリアリズムの精神が香水作りに生かされていた19世紀の古典的な処方を受け継いだ香水と言える。

一方のシャネルNo.5の香りも、古典的な花束の香りをベースに据えている。実際に嗅いでみると、エルネスト・ボーが語るような湖の朝の香りというよりもむしろ、豊かな花束の香りを喚起する。この点でシャネルNo.5は赤いモスクワとよく似たイメージを持っている。

しかし両者の間にははっきりした違いもある。赤いモスクワが豊かな香りの中に、むせ返るような生花独特の青さを残しているのに対し、シャネルNo.5にはそれがない。シャネルNo.5は花の香りを感じさせる一方で、花ではない別のもの、たとえばパウダーの甘い香りや霧のような湿度の感触を与える香りに覆われている。

花束をイメージしたシャネルNo.5の基本的な構

成は帝政ロシアの古き良き時代の香水の典型である。その土台の上にボーは、湖面を渡る風に美を見出す自然へのロシア的な感性を表現したのではないだろうか。

2 モダニズムから永遠の命へ

ボーが生涯にわたってロシアの芸術品の収集に携わったことは知られている。ヴィリギンは回想の中でエルネスト・ボーのアパートはボーが収集したコレクションによって博物館と化していたと述べている。その中にはロシアの聖ヴラジーミルや聖アンドレイなどの名称をもつ有名な磁器セットや絵画が多く含まれていた。⁴⁶

エルネスト・ボーはパリ生活の中でもロシアのバレエやオペラを好んで鑑賞し、自分のオフィスを18世紀の様式にしつらえていた。ボーが作り上げた生活の中には一貫して帝政ロシアの文化が息づいていた。

モダニズムが席卷する戦後のパリや未来の創造に全力を注いだ1920年代のソヴィエトと同じ価値観をエルネスト・ボーが共有していたとは思われない。エルネスト・ボーは創作者として新しさを追求する精神を忘れなかったが、フランスに住んでからも帝政ロシアの古き良き時代を生きようとした。

新しさだけを追求した香りは短命である。チャンネルNo.5の長い命脈の源は現代性よりもむしろ、エルネスト・ボーがロシアの文化や過去の追憶に見出した永遠に色あせない美の中にある。

¹ エドワーズ (2005)、40 頁参照。

² Beaux (1946), p.230 より引用。

³ ボー家の構成の経歴については以下を参照した。*Москва : Энциклопедия. Библиотека История Москвы с древнейших времен до наших дней.* (1997)C. 123.

⁴ ラレ社、ブイス社については Кожаринов (2005), C.66. 参照。

⁵ Кожаринов (2005), C.67. 参照

⁶ 1 グロスは12 ダース、すなわち144に相当するため、2 グロスは288。括弧内は大野による補足。

⁷ Beaux (1946), p.228 より引用。大野訳。

⁸ エルネスト・ボーはすでにロシアにいる時期にチャンネルNo.5の前身となる香水を作っていたとする説もある。これは本稿では取り上げないが、決して根拠のない説ではない。

⁹ Beaux (1946), p.230 より。

¹⁰ サガン、アノトー (1984)、186 頁参照。

¹¹ Веригин (1996), C.176.

¹² 柴田、樺山、福井 (1995)、215-216 頁参照。

¹³ 柴田、樺山、福井 (1995)、219 頁参照。

¹⁴ 柴田、樺山、福井 (1995)、239 頁参照。

¹⁵ Веригин (1996), C. 138. より。

¹⁶ Веригин (1996), C.142. より。

¹⁷ Рассказов, Павел Петрович (1952), C. 3-4. 参照。

¹⁸ 田中、倉持、和田 (1994)、7 頁参照。

¹⁹ 田中、倉持、和田 (1994)、52 頁参照。

²⁰ 田中、倉持、和田 (1994)、61 頁参照。

²¹ 田中、倉持、和田 (1994)、63 頁参照。

²² ダニロフ、コスリナ、ブラント (2011)、365-366 頁参照。

²³ *История гражданской войны в СССР. 1917-1922. : Упрочение советской власти. Начало иностранной военной интервенции и гражданской войны. Ноябрь 1917г. – Март 1919г.* (1957)T. 3. C. 200.

²⁴ *История гражданской войны в СССР. 1917-1922. : Упрочение советской власти. Начало иностранной военной интервенции и гражданской войны. Ноябрь 1917г. – Март 1919г.* (1957) T. 3. C. 200.

²⁵ *Географический атлас России / Федеральная служба геодезии и картографии России.*(1997) C.24.

²⁶ *История гражданской войны в СССР. 1917-1922. : Упрочение советской власти. Начало иностранной военной интервенции и гражданской войны. Ноябрь 1917г. – Март 1919г.* (1957)T. 3. C. 201. より抜粋。

²⁷ *История гражданской войны в СССР. 1917-1922. : Упрочение советской власти. Начало иностранной военной интервенции и гражданской войны. Ноябрь 1917г. – Март 1919г.* (1957) T. 3. C. 200.

²⁸ «Кто вы, Эрнест Бо?»(2007)を参照。この記事は数回にわたり雑誌「Независимый взгляд」に掲載された。

電子版を以下の URL よりダウンロードした。<http://www.arhpress.ru/neboz/2007/2/20/9.shtm>

オリジナルの情報が多い一方、他の資料と食い違う点も散見されるため、本稿ではこの記事のみで取り扱われるインタビューの箇所に限り参照した。

²⁹ «Кто вы, Эрнест Бо?»(2007)を参照。

³⁰ Рассказов (1952), C.42 より引用。

³¹ Рассказов (1952), C.41 より引用。

³² Рассказов (1952), C.41 より引用。

³³ Веригин (1996), C.118-119.

³⁴ Рассказов (1952), C.49 より引用。訳文中の括弧内は大野による補足。

³⁵ Рассказов (1952), C. 52 より引用。

³⁶ «История гражданской войны в СССР»(1957), C. 200.

³⁷ 原文は«Прощайте, товарищи.»となっている。Прощайтеは永久の別れに際して使われる。

³⁸ Рассказов (1952), C. 53-54 より引用。11月20日、21日ごろのエピソードである。マイナス20度の厳寒での強制労働。

³⁹ ダニロフ、コスリナ、ブラント (2011)、354 頁参照。

⁴⁰ ダニロフ、コスリナ、ブラント (2011)、84-85 頁参照。

⁴¹ Beaux (1946), p.230 より。

⁴² 柴田、樺山、福井 (1995)、243-244 頁および年表 38 頁参照。

⁴³ ダニロフ、コスリナ、ブラント (2011)、366 頁参照。

⁴⁴ Рассказов (1952), C. 3 を参照。

⁴⁵ Веригин (1996), C.141.

⁴⁶ Вери́гин (1996), С.146 より。エルネスト・ボーの息子、エドアルド・エルネストヴィチ・ボーは、同じく調香師の道を進み、ロシア絵画の熱心な収集家としても知られた。息子エドアルドはエルネストのコレクションとともに芸術への収集熱を受け継いだのであろう。息子については以下を参照。Российское зарубежье во Франции 1919-2000 : Биографический словарь в трех томах. (2010) Т. 2. С. 173.

参考文献

和文文献

マイケル・エドワーズ著、中島基貴訳（2005）『パフュームレジェンド 世界名香物語』フレグランスジャーナル。
 フランソワーズ・サガン、ギヨーム・アノトー著、鷺見洋一訳（1984）『香水』新潮社。
 柴田三千雄，樺山紘一，福井憲彦編（1995）『世界歴史大系 フランス史 3』山川出版社。
 田中陽児，倉持俊一，和田春樹編（1994）『世界歴史大系 ロシア史 3』山川出版社。
 アレクサンドル・ダニロフ、リュドミラ・コスリナ、ミハイル・ブランツ、吉田衆一監修、アンドレイ・クラフツェヴィチ監訳（2011）『世界の教科書シリーズ 32 ロシアの歴史「下」19世紀後半から現代まで』明石書店。

欧文文献

Beaux, Ernest (1946) « Souvenir d'un parfumeur » Industrie de la Parfumerie. Paris.
 Москва : Энциклопедия. Библиотека История Москвы с древнейших времен до наших дней. Главный редактор С.О. Шмидт ; Составители, М.И. Андреев, В.М. Карев—М.: Научное изд-во Большая российская энциклопедия. (1997)
 Вери́гин, Константин Михайлович (1996) Благоуханность : Воспоминания парфюмера—М.: КЛЕОграф.
 История гражданской войны в СССР. 1917-1922. : Упрочение советской власти. Начало иностранной военной интервенции и гражданской войны. Ноябрь 1917г. –Март 1919г. / Под ред. М. Горького и др.—М.: ОГИЗ. Гос. изд-во полит. лит-ры. (1957)Т. 3.
 Кожаринов, Вениамин (2005) Русская Парфюмерия :

Иллюстрированная история—М.: Вся Россия.
 Российское зарубежье во Франции 1919-2000 : Биографический словарь в трех томах / Под общей редакцией Л. Мнухина, М. Авриль, В. Лосской—М.: Наука. дом-музей Марины Цветаевой. (2010) Т. 2.
 Рассказов, Павел Петрович (1952) Записки заключенного—Архангельск : Архангельское областное государственное издательство.
 Географический атлас России / Федеральная служба геодезии и картографии России—М.: Картография. (1997)
 «Кто вы, Эрнест Бо?» Независимый взгляд. Архангельск: Пресса Архангельской Области. 20 февраля 2007. №6. (2007)

Творческое вдохновение парфюмерии «Шанель №5»

Оно Токико

Ono Tokiko

Краткое изложение

В наши дни «Шанель №5» - самая популярная и известная парфюмерия в мире. Однако эти духи далеко не новы. Аромат был создан в 1920 году, и до сих пор причина их успеха объясняется талантом Габриэль Шанель. Однако истинный творец «Шанель №5» - парфюмер Эрнест Эдуардович Бо.

Бо родился в России и работал на московской парфюмерной фабрике фирмы «Ралле» в царское время. В своих воспоминаниях он излагал что, источник вдохновения «Шанель №5» - свежий аромат, берущий начало из озер северных стран. Нам нужно пересмотреть «Шанель №5» с точки зрения жизни Эрнеста Бо и русского парфюма.

Для того, чтобы понять смысл слов его воспоминаний, мы рассмотрим жизнь Эрнеста Бо в России. Эрнест Бо - выходец из французской семьи, но родился и рос в Москве. В качестве парфюмера служил на российской парфюмерной фабрике компании «Ралле».

Однако, в связи с французским подданством, в 1914 году Бо был призван на военную службу и зачислен во французскую армию.

С 1918 года нес службу в войсках контрразведки высшего командного штаба союзной армии, а затем работал комендантом лагеря для военнопленных красноармейцев в России. Один из военнопленных этого лагеря Рассказов опубликовал свои воспоминания, в которых есть место и Эрнесту Бо.

Бо был очень жестоким офицером. Бывали случаи, когда он избивал военнопленных и присваивал их еду. Гражданская война была ужасна не только для русских, но и для интервенции и белой армии. Эрнест Бо потерял в России всё, работу, состояние, лишился и повода вернуться в Россию.

Осенью 1919 года его войска возвращались в Францию через северную Европу. Озера и реки тех мест излучали особо свежий аромат.

Почему запах рек и озер вдохновил его на творчество? Что он нашел в этом? Мы не можем ответить на этот вопрос, но вероятно, что этот аромат – это та самая красота, которая существует в русской природе и культуре. Он нашел эту красоту, пройдя ужасы войны и лишения родины.

Какова же сущность аромата «Шанель №5»? «Шанель №5» - это наполнитель русской красоты и истории российской парфюмерной индустрии.

Бо - создатель многого современного французского парфюма. Однако он любил классическую красоту. И его ароматы созданы из русского искусства императорской России. Сущность «Шанель №5» — не модернизм, а вечная красота.

(2012 年 6 月 1 日受理)